琉球大学学術リポジトリ

現代の建築、都市計画、および「まちづくり」の思想と現代社会の理念　－コルビュジェ、ミース、ガウディの対照的検討を基に－

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2010-02-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 高畑, 明尚, Takahata, Akihisa
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002005367

現代の建築、都市計画、および「まちづくり」の思想と現代社会の理念

－コルビュジェ、ミース、ガウディの対照的検討を基に－

高　畑　明　尚

0　問題の所在

20世紀後半より、一方では都市計画や大都市の破綻への反省、他方では公害運動から環境運動を経て、「まちづくり」が世界的なキーワードとなってきた。

日本でも、今日では、従来的な都市計画論の反省に立った議論や、工学的なランドスケープ論に基づくもの、都市工学的な交通論に基づくもの、あるいは中心市街地（つまりは商店街）の衰退を転機とする地域形成の議論、さらには市民運動、環境運動、住民運動等の系譜に位置付く主体形成的観点からする議論など、さまざまな観点からの「まちづくり」論が盛んである。

その論点も、近代的巨大都市の行き詰まりの反省に立った「コンパクト・シティ」や、環境運動やエコロジーと関わる「エコ・シティ」、いわゆる高齢化社会との関わりも含めてユニバーサル・デザインやノーマライゼーションを追及する「人にやさしいまちづくり」、あるいは、「まちづくり」の主体は誰なのか（たとえば「市民主体のまちづくり」など）という点や、とくに日本では、従来の土木行政の反省に立った、これからの都市計画、さらには社会政策や社会福祉とも関連しての住宅政策、公共住宅行政、集合住宅など、まさに我々の生活のすべてにまたがる様々なものとなっている。

だが、さまざまな分野や領域を横断し複雑に階層を構成する「まちづくり」とその議論の中で、意外にも、「まち」の主要な構成要素の一つであり、非人格的（＝物象的）な主体として従来の「まちづくり」をリードしてきた建

築のあり方に対する議論や展望は、「まちづくり」論としては、福祉やエコロジー等の観点を除いては、管見するかぎりは少ないと言える。つまりは、幾層にも成った「中心と周縁」という都市の階層構造の物象的要因としての近代建築の理念や様式に対する議論は、「まちづくり」論としては少数派であると考えられるのである。

その理由としては、従来の、都市計画などと呼ばれてきた「まちづくり」の主要構成要素としての建築とその様式や理念は、その都市計画自体が「まちづくり」という観点から批判的に捉え返されているために、もはや建築は単なる手段であり、生きた人間個々人が主体となる「まちづくり」にとっては、たんなる従属関数でしかないという判断もあると思われる。

あるいは、諸氏・諸流入り乱れながら交互に作用を及ぼしてきた近代的建築とその様式は、もはや否定すべきものでしかなく、他方で、建築様式としては時代を画するものもない今日的状況[1]の中で、建築という点からも「まちづくり」の理論や実践からも、捨て去るべきものへの反省など、一部の考古学的運動でしかないのかもしれない。

とはいえ、これからの「まちづくり」が、従来の大規模な都市計画に基づく「まちづくり」の反省の上に立つものであるならば、その都市計画をリードした建築理念や様式は、これを改めて十分に検討しておく必要がある。それは、一部の建築家や工学研究者の専門家的な復古運動という文脈においてではなく、あるいは従来の都市計画の反省という点に留まるのでもなく、これからの「まちづくり」のために20世紀の「まちづくり」がなぜ今日的には反省や批判の対象にならなければならないかという位置づけにおいてである。その上で、この検討は、現代社会のシステムや理念の再検討・展望ということにも繋がるものである[2]。

こうした点において、今日的な鉄筋コンクリート住宅群という建築様式の源流となったル・コルビュジェ[3]と、コルビュジェらの成果がアメリカや、それを模倣する地域で、巨大ビル群として顕現する元を形作ったミース・ファ

ン・デル・ローエ[4]が検討対象の筆頭に挙げられる[5][6]。また、彼ら、いわゆる近代合理主義建築の代表者との比較対照という意味において、それとは対照的な位置にあるとも評されるアントニオ・ガウディも検討の俎上に載せるべき建築家であろう。

そこで本稿では、これら三者を、比較対照的な観点も含めて検討し、その上で、現代的な建築、あるいは、それに基づく都市計画とは、いったい何をどのように表し追及したものなのか、その理念とは何かを明らかにしたいと思う。

というのも、こうした検討・考察は、今後の、建築や都市計画のあり方に示唆を与えると共に、それらを踏まえての、これからの「まちづくり」の展望をも導き出すことになるからである。

本稿では、最後に、この点にも言及することにする。

I　近代建築の「モダニズム」とル・コルビュジェの建築・都市計画・理念

現代[1]の建築は、モダニズムと、それへの反省という系譜で見ることができる。

現代に入り、建築の様式は、その理念や、それを可能にする技術も併せて、それまでの諸々の試行や経験を並存・消化しながらも、一つのムーブメントを形作ってきた。

磯崎新氏の言うように、「近代建築とは…一九一〇年代から二〇年代にかけて、ヨーロッパで様々に起こってきたバラバラの運動だった」[2]としても、今日において近代建築への反省が不可避なことに鑑みても、それは、現代社会が資本という単一の原理に巻き込まれていく中で、個々の建築上のアイデアやデザインには無関心に、社会的なものとして一つの大きな流れを形成したと言える。

つまり、19世紀から20世紀初頭にかけてのさまざまな近代建築運動が1920年代に「ほぼ同様な主張と形態をもった建築へと収斂し」[3]た結果、それが「建築は必要によってのみ決定される機械のようであるべきだと」[4]の主張に貫かれ、「白いなめらかな表面によって囲まれたまったく装飾的細部を欠いた」[5]形態を提示していることを、「インターナショナル・スタイル（国際様式）の建築」または「モダニズムの建築」の形成と見て取ることに無理はないと考えられる[6]。

この建築におけるモダニズムまたはインターナショナル・スタイルは、後者の命名者であるヒッチコックとジョンソンの指摘するところでは、その特色が次の３点にまとめられる。すなわち、「①マス（量塊）や物体ではなく薄い表面に包まれたボリュームとしての建築。②軸をもったシンメトリーなどの明白なバランスとは異なる規則性の指向。③付加的な装飾の忌避、および材料に固有の気品、技術的完璧さ、洗練されたプロポーションの尊重」[7]の３点である。このように整理される建築のモダニズムについて、吉田鋼市氏は、「要するに、科学・技術を信奉し、社会の進歩を信じ、慣習をひきずった土着的・地方的なものを排斥し、機械をモデルとした簡潔・明晰・潔癖な形態をめざしたのが、モダニズムの建築といえる」[8]と把えている。

そして、現代建築において、こうした特色や本質から最も注目されるのが、ル・コルビュジェ[9]である。

ペレやガルニエという鉄筋コンクリート造の建築を提示した建築家たちを淵源の一つとする近代建築[10]は、鉄筋コンクリートを技術的要件とした建築と、それと連携した都市計画や「まちづくり」を提唱したコルビュジェにおいて、一つの頂点を成すと言える[11]。

というのも、近代的な建築や都市計画においては、鉄やガラスや鉄筋コンクリートといった工業素材の利用と現場組立てという生産と工法の建築上の革新が重要な転換点を成す[12]のだが、これと関わりコルビュジェは、「近代社会の視点の変化は、多くの技術的発明――すなわち強度の計算と、鋼鉄お

よび鉄筋コンクリートの使用――に起因している」[13] ということを基にして、鋼鉄と鉄筋コンクリートとを建築や都市計画のあり方とを結びつけていったからである。この場合、建築物の「各階の使用が耐力壁の厳密な構造に依存しないような構造」[14] を作り出すことができたということがポイントである。

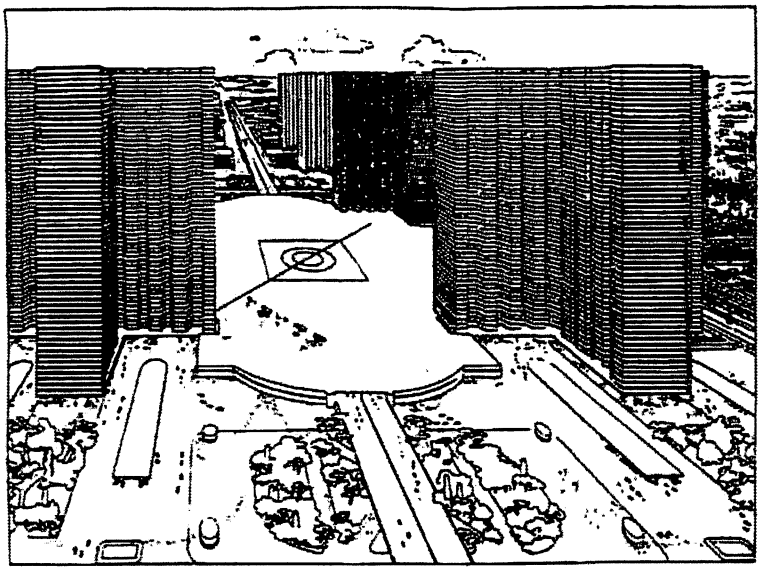
また、コルビュジェは、このような現代社会における科学技術（とその変化・発展）の建築上の成果と幾何学[15] とが切り結ぶ地平で、建築物群の在り様を展望していった。「ル・コルビュジェの手法は一方にそうした初等幾何学的な形態の基準を置きながら、他方に極めて具体的な機能的要素を置き、それらを結びつけるような形の装置を発見しようとする。機能的要素はその働きだけが先入見のない思考によって問い正されてゆく」[16] のである。

このような、「初等幾何学的な形態の組合せを構築しておいて、それを」「具体的な装置にまで接近させてゆき、機能を吟味してゆこうとする態度」によって、「まさに真正な機能主義者が辿った思考と逆の道筋を切り分けてゆく」[17]ことにより、技術上の制約あるいは可能性が建築物の形状を規定し、建築物の素材と形状によって人間の活動様式が制約を受けるということも可能になるが、これは、従来の建築物のあり方からすれば、言わば、「転倒」したあり方である。

そして、これが建築上の方法となるのが建築のモダニズムの帰結であり、その行き着く先は、高層ビル群である。

コルビュジェにとっても、一面で、「これからなすべき改革は、水平な庭園都市の代わりに、垂直な田園都市を立てること」[18] なのであった[19] [20]（図１参照。）。

だが、その一方で、「機能的要素」が「その働きだけが先入見のない思考によって問い正されてゆく」のであれば、素材と形状から導き出される建築物の機能は建築の目的には無関心であることになる。コルビュジェにおいては、このような建築のモダニズムの徹底が、まず非人格的な建築ありきという、使用する人間の活動が建築物に制約されるということに留まらずに、む



【図１】ヴォワザン計画(1925年)
－出典：相田・土屋『都市デザインの系譜』117頁－

しろ、人間の活動が、それには無関心で、本来的には自由であることにストレートに基づいたものであるということにおいて建築や都市計画の理念が形成されたと考えられる[21]。コルビュジェにとっては、「建築は自由への参加である」[22]のであった。

言い換えれば、コルビュジェにおいては、建築物や建築物群、さらには設計された都市は、それらが活動主体である人間個々人に対して客観的非人格的（＝物象的）手段であるがゆえに、生きて活動する人間個々人の主体性の発揮（諸々の活動、つまりは使用の仕方）次第でどうにでも意味づけられるものとして位置づけられていると考えられる。

コルビュジェにあっては、居住ということも現実に生きて活動する人間の「機能」なのであり[23]、建築物や建築物群は「機械主義社会のために役立つ

都市計画の道具類」[24] なのである。また、コルビュジェの「都市計画は住居の計画からはじま」るが、ここでの「住居の計画」とは「生活の設計」[25] なのである。それゆえに、「300万人のための現代都市」計画[26] は、「立体街路では車と人とが分離され、豊かに広がる緑のなかに、家具・設備が一体的に設計され、通風・日照ともに十分な『住むための機械』が立ち並ぶものであった」[27]。

このような個々人の主体性をストレートに基点に据えるという、いわば建築のモダニズムとは正反対の志向性をもつがゆえに、コルビュジェにおいては、建築や都市計画の理念も、非有機的な建築物・計画都市に対する有機的なもの[28] として構想されることとなり、それが「調和」[29] という様相で打ち出されることとなった。それゆえに、これにより、磯崎氏の言うところの、「全体がハーモニアスに、人体の諸器官のように順調な循環を都市の中でやっていくという」「コンセプト」[30] が形成されることになるのである。

だが、こうした建築・都市計画の理念の在り様は、同時に、また別の重大な問題を並存させるものでもあった。コルビュジェにあっては人間個々人を中心とした建築（物）の設計というコンセプト[31] に基づき、個人住宅も都市計画もモチーフにおいては共通のものを持ち、「そこに根源的にいるのは、行為する個人であり、建築されるのは新しい生活であり、環境は実態、方法いずれにもわたって改善されなければならないとされる」[32] のだ[33] が、相田武文氏と土田和男氏の指摘に依れば、こうした「コルビュジェの都市計画に欠けているのは、多くの建物の集合がつくり出す環境についての配慮と、それらのなかに住む人々の共同性に関する視点であり、また、既成の都市空間に対する連続性である。ユニテには多くの人が住み、共同性を有しているが、あくまでも一棟単位である」[34] のである。

両氏は、この点について、「これが何棟も建ち、地上部が緑に覆われたとして、果たしてそこが快適な場所となるだろうか」[35] と疑問を呈している[36] が、現代社会が市民社会であり、市民が私的所有者を含意する上では、そう

いう社会的に形成される人間と自然との関係よりも、土地や建築物という自然にいかに関わるかという人間と社会との関係の方が、より規定的な問題を有することになる。

つまり、私的所有対象としての建築物とそれに内包される空間は、プライベートな、他者が侵すべからざる客体（対象）なのであり、このかぎりにおいて、建築物やその空間に関わる個々人の行為・活動は建築物との直接の関係のない自由なもの[37]であって、この場合には社会的な統一性や公共性を前提とすることはできないのであるから、全体としてどのような「まちづくり」が行われ、どのように都市が形成されるかは、公共空間の在り様も含めて、一般化することはできないのである。共同化が可能なのは、建築物とその空間の所有の在り様だけである[38]。

このようなコルビュジェの理論上の欠点は、それを継承していく理論や実践においては、不可避的に展開されることになる。

コルビュジェの場合には抽象的な理念・理想として無規定なものが無規定なままで一般化されるに留まることは可能であっても、それを継承し実践していく上では、いわゆる公共空間も含めて、人間個々人の活動により産み出されるべき共同社会的なものの無規定性は、私的所有制度を一つの側面とする現代の社会システムに基づけば、建築物やその空間に対する私的所有の無批判な肯定へと転回[39]し、人間と建築物やその空間との関係は、人間主体に対する客体的建築物という関係から、建築物という非人格的物象的存在に対する客体としての人間（活動を制約され方向づけられる人間個々人）という関係に転回する[40]。ここでは、建築や都市計画が主体性を帯びたものとして立ち現われ、人間個々人は、それに従属する客体となる。

それゆえ、「モダニストにとって重要な関心は、建築の表面の仕上げではなく、あくまでも抽象的な建築の理念にあった」[41]のだとすれば、その理念という点において、コルビュジェもまた、建築のモダニズムからは出ていないことになる。富永譲氏のように、コルビュジェ以降の建築を「歴史や地域

的なものを貫いてゆく人間の精神性は置きざりにしたまま、ただ技術的な手法だけが一般化し、〔コルビュジェのような精神豊かな人間のための建築を目指した－引用者〕理論は〔形骸化しながら－引用者〕普遍化し感染的に広がっていったのではないか」[42] と判断するとしても、コルビュジェが理論的に前提とする「人間」や「精神」が現代社会（のシステム）との関わりにおいて具体化されていない抽象的なものに留まるのであれば、それは、「人間の精神性」を具体化させない技術として非人格的（＝物象的）に展開するのも当然と言える。そしてそれは、コルビュジェの都市計画の構想にあっては、「アテネ憲章」（1943年）へと至る流れの中でも「『都市を居住・労働・休息・交通という主要な四機能でとらえ、しかもそれを相互に分離する』という、こののちの都市形成に深刻な影響を与える内容が含まれていた」[43] ことからも了解できる。

この「アテネ憲章」は、コルビュジェらの関わった第４回近代建築国際会議（1933年）のテーマを経由したものであるが、それはまさに、コルビュジェの「機械主義社会のために役立つ都市計画の道具類」が非人格的に展開されたものでしかないと判断できる。

つまり、「アテネ憲章」を介して捉えれば、コルビュジェの建築理念には、相反するものが同時に存立しているという「転回」の構造を見ることができるが、この「転回」する理念は、人間と建築物とを、たとえば自然や人間の活動（または労働）という根拠に遡って統一的に把握するのではなく、いわば二元論的に把握しているがゆえのことであると考えることができる。

ここに、コルビュジェは、一方で、建築に人間の自由の実現を見るという理想を内包しつつ、他方では、この二元論的思考法により、近代建築のモダニズムを出ることのないまま、内容的に「転回」する矛盾した建築理念を形成していたと判断できよう。

では、建築の理論も実践も、コルビュジェのようなモダニズムの二元論を超え出ることのできないままに留まるのであろうか。言い換えれば、人間の

自由の実現を建築という形に変えた理念は形成できないのであろうか。

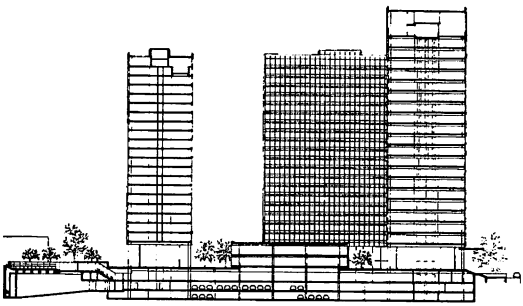
Ⅱ　モダニズムの超克とミース・ファン・デル・ローエ

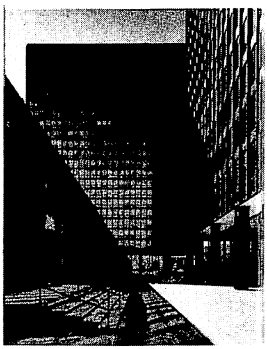
先に見たように、コルビュジェの建築理念が建築のモダニズムそのものだとすると、その後継者たちにとっては、近代建築の発展とは、建築のモダニズムの展開であるのか、それとも建築のモダニズムを批判し否定するものであるのかという、相反する二面を共に意味することとなる。さらに言えば、こうした試みは、建築の世界に留まらずに、現代社会の在り様を普遍的に捉え返し、その否定と展望を導出することにもなる。建築とは、現代社会に生きる人間個々人の諸活動の所産だからである。

こういう点で注目されるのが、近代建築史上においてコルビュジェと並び称される、ミース・ファン・デル・ローエである[1)]。

ローエもまた建築のモダニズムを継承する者であり、したがって彼にとっても、「どう住み、どう生きるか」という（主体としての人間の本質を形成する）問題に直結する、新しい都市像の提案は、建築の最重要課題であった[2)]。そしてそれは、「幾何学的で普遍的な形態言語への転換、工業化社会にふさわしい施設・交通体系の充実、建築の生産・施行の工業化」[3)]という形で実現されるべき事柄であり「もともと単体の建築で解決できる問題ではなく、社会あるいは都市全体との関連のうえで具体化すべきものと考えられた」[4) 5)]（図２および図３参照。）。

この点に関して、ミースは、オフィスビルも田園住宅も鉄筋コンクリート製のものを提案しており[6)]、それらにおいて「コンクリート、鉄、ガラスという素材とオフィスビルおよび田園住宅というビルディング・タイプの二つの要素から、建築としてどのような解が可能であるかを考案した体裁になっている」[7)]。この文脈において田中純氏は、「建築の工業化とは素材の問題である」[8)]との前提に立ち、「素材に即した唯物的なアプローチ」や「徹底した





【図２】ウェストマウント・スクェア(1965～1968年)のプラン（左）
【図３】ウェストマウント・スクェアの実物写真（右）
－出典：D・スペース『ミース・ファン・デル・ローエ』250頁(図２)および251頁(図３)－

即物性への志向」が「ミースの分析の特徴である」[9]としている。これに基づけば、「現代という時代の所与的条件として与えられた」「素材に内在する論理の追求」[10]が、ミースの方法であったということになる。

このようなミースの方法は、フォルマリズムへの批判に基づくものである[11]。そして、ミースにあっては、このフォルマリズム批判という姿勢から、「構造の明確性と空間の普遍性を追及」[12]することとなり、また、「われわれにとって重要なのは、建築行為（Bauerei）を審美的に解放し、バウエンを再びそれが唯一そうあるべきもの〔すなわち『バウエン』－引用者〕にすることである」[13]という、彼自身の建築の目的が導き出されたのである。

しかし、このように関係自体が自己産出的または自己目的的であるということは、それが抽象的であり、したがって普遍的であると同時に、ここでもまた必然的に、それを内容規定し意味づける主体は別のところにあるということになる。また、それと共に、この主体が直接に生きて活動する人間個々人ではないならば、この主体が客体的なものとして具現化する運動は、人間個々人に対して支配的なものとなる[14]。

したがって、たとえ、「それ自体がすでに模倣でしかない技術的形態の根源において、『想像［＝創像］的に模像する』ことにより、時代の本質というイデアを模倣［ミメーシス］することがバウクンストの営みなのである」[15]としても、この時代とそれを形作る社会を産出するのは、ミースにおいても人間個々人ではなく、「技術がそれ自身として完成することによってバウクンストにおのずから変容する過程」[16]だということになる[17]。これはまさに、プロセスがプロセスを産出するという自己産出的または自己目的的な論理を指すものである。

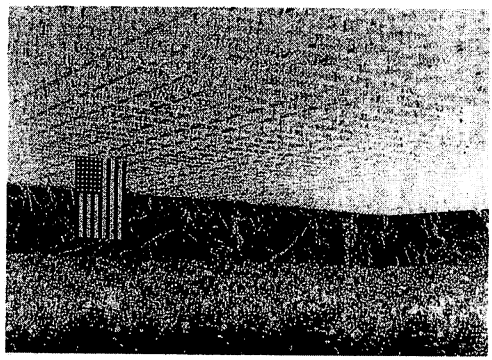
ここには、自らの、生きるという行為、つまり活動するという行為で以って社会関係と社会的諸形態を産出する直接の主体としては、人間個々人は位置づけられていない。自己産出的にして自己目的的である主体の主体性、つまりその関係性のみが、その存在に該当する関係、言い換えればそれの場面・環境を産み出す主体として、暗黙に、あるいは論理的に位置づけられることとなる[18]。そして、この閉じることのできない「同語反復的なバウエンの論理」[19]、言い換えれば悪無限的なシステムこそ、現代社会に実在するものとしては、この社会システムそのもの、つまり資本である[20]。

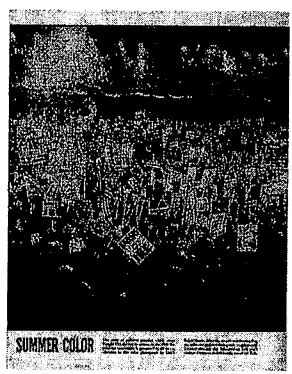
ここに至り、コルビュジェに代表される建築のモダニズムを乗り越えるということは、現代社会において産み出された技術・科学と、現代社会の主体の転倒性（人間個々人から自立化した社会システム自体が主体となること。）[21]ないしは転回性（二つの主体・客体関係が同時に成り立っていること。）とから、それらを基に超え出るということになる。

では、ミースは、それを、いかに解決しようとしたのであろうか。

この点においては、ミースの技術的軸点と、それを用いた実践が参考になる。技術的にはグリッド（格子または方眼）構造の重視であり、それを用いた「アメリカ民主主義」への批判[22]が、それである。

図４のグラフィックはこのことを象徴するものであり、田中氏に依れば、ここでは、「アメリカの民主主義がその代表＝主人を選び出す大統領選挙と





上――コンベンションホール案、シカゴ、一九五三年、フォトモンタージュ。出典＝『建築文化』六一六号、No.94。
下――『ライフ』誌一九五二年八月四日号より、ドワイト・D・アイゼンハワーを大統領候補に選出した直後における共和党大会の光景。出典＝Life, Vol. 33, No.5, August 4, 1952, 43.

【図４】ミースのコンベンションホール案(1953年)
およびアメリカ共和党大会光景(1952年)
－出典：田中純『ミース・ファン・デル・ローエの戦場』237頁－

いう儀式の光景を素材に、それをトラス列の無言の圧力の下に配置することによって、この儀式にともなう熱狂や興奮を洗いざらい拭い去ってしまっている。この画面上でアメリカ市民はもはや、グリッドに似て中性的な権力を後見とした自由で多様な個人ではなく、純粋な数に還元された選挙民の単なる集積であり、明確な形を欠いたマスに過ぎない。中心ももたずにのんべんだらりと拡散する群衆をサンドイッチ状に圧縮して形を与えているのは、彼らの存在とは無縁なままに空中に吊されたトラス列である」[23] のである[24]。

そして、「アメリカ都市構造のグリッド・システムが示すような自由主義的な多様性の幻想とはまったく逆の、身体なき民主主義社会の数への暴力がここではトラス列の圧力のもとで表象されている」[25] のである。八束はじめ氏に依れば、「人で埋まったコンベンション・センターの空間は」「『ノーマン・ルール〔無人支配－引用者〕』の空間である。」[26]

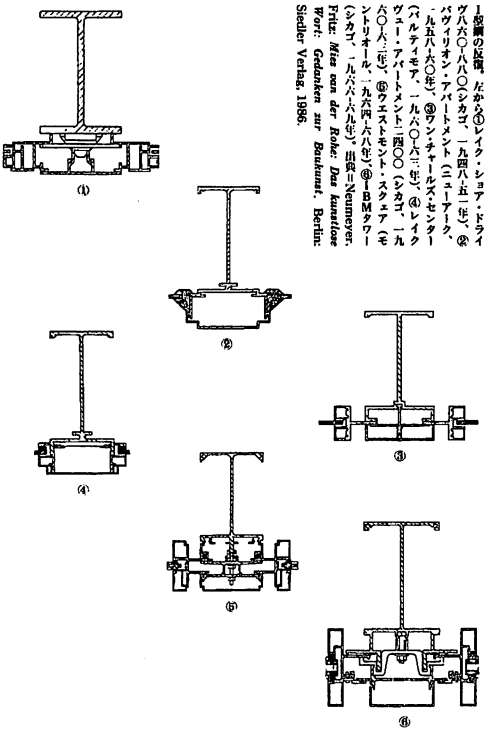
このような、生きて活動し社会関係や社会諸形態を産出する人間個々人が抑圧され主体性を喪失したかのような状況になること[27] に対するミースの回答は、「建築とは空間に移し入れられた時代の意志である」[28] と表明する[29] ことで、ハイデガーの如く、「時代の客観的な要請に服従すること」[30] であった[31]。

しかし、このような現存在に対する普遍的存在を前提とすることは、普遍的存在に内在する普遍的理念を想定するものであると同時に、現存在が普遍的存在の現象（形態）である[32] ということにもなってしまう。

そしてミースのように「『時代の客観的要請』とはあれこれの実際的な必要性ではなく、この〔「真理関係」における－引用者〕事実性」[33] であるとすると、現代社会という時代と社会とを規定するものを技術とすることにより、建築は「技術」の現象（形態）となる[34]（実際の在り様としては図５を参照。）が、しかしこの「技術」自体が、自己更新の原理を含むものではないかぎり、他の実体の現象（形態）である。

とはいえ、ミース自身も、このことを問題視していたと考えられる。なぜならば、ミースが「技術がそれ自身として完成することによってバウクンストにおのずから変容する過程」を「時代の形態の開示と呼んでいる」[35] ことにより、「技術」は悪無限的に自己更新する実体の現象、言い換えれば、それが実在する社会的主体、つまりは資本という社会システムの形態であり、それゆえにこの社会システムに規定されることを内容的には含意するものとなっていたからである。

しかし、ハイデガーの理論的所産の社会実践的解決がルカーチの「意



I型鋼の反復。左から①レイク・ショア・ドライヴ八六〇―八八〇（シカゴ、一九四八―五一年）、②パヴィリオン・アパートメント（ニューアーク、一九五八―六〇年）、③ワン・チャールズ・センター（ボルティモア、一九八〇―八三年）、④レイクヴュー・アパートメント二四〇（シカゴ、一九六〇―六三年）、⑤ウエストモント・スクエア（モントリオール、一九六四―六九年）、⑥IBMタワー（シカゴ、一九八六―八九年）。出典＝Neumeyer, Fritz: *Mies van der Rohe: Das kunstlose Wort: Gedanken zur Baukunst*. Berlin: Siedler Verlag, 1986.

【図５】Ｉ型鋼の反復
＝典拠：Fritz Neumeyer “Mies van der Rohe”＝
－出典：田中純『ミース・ファン・デル・ローエの戦場』255頁－

識」[36]であるとすれば、ミースもまた理論的構成を現存在に留める（言い換えれば、彼岸たる「真の社会」と此岸たる現代社会とを媒介する論理が無い）ことにより「解決すべきものはすでに解決されていなければならない」という悪無限的課題を内在させてしまうことによって、「技術」の「実体」である資本という現代社会の具体的なシステムの具体的否定という課題は、ミースにおいても後景に退いてしまう。たとえ「ミースが建てる建築の規模は日増しに巨大化し、技術の『約束』はますます脅威的なものにな」り、「所与

としてのこの技術の世界に呑み込まれることなく、いかにしてそれをバウクンストとして表現し、価値をそこに付与するかという課題は、ミースにとって以前にも増して切迫したものだったに違いない」[37]としても、それゆえに、その課題の解決は、「価値秩序を形成する『精神的決断』の空間的実現としての建築」[38]であり、「決断することを決断する」[39]という自家撞着の悪無限的な単なる形式性の問題へと後退するのである[40]。

このように、ミースの思考法がハイデガー風であるとしても、それが哲学的に抽象的なものとなるまでに抽象化される局面は、ハイデガーのように現存在という一般性ではなく、建築に集約される「技術」である。そして、このような「技術」から現に存在する社会のシステムのシステムであるという本質だけを抽象したとき、ミースにあっては、この「技術」を歴史的に形成し現在において維持する行為としての、個々人の生きて活動すること、言い換えれば生活または労働は、捨象される。

そして、これらが捨象されたとき、現に存在する社会のシステムである資本のシステムは、システム把握としては抽象的であり、そのために、その普遍性のモメントと個別性のモメントとが相互に対自的に根拠づけ合うという形を取ることになる。それは、資本とは、社会原理として普遍であるとともに、個別資本として個別であって、資本というものの発生点を問わないかぎり、社会システムとしての資本の普遍性は個別の資本の存在原理によって根拠づけられ、個別資本の方は、社会システムとしての資本の普遍性によって根拠付けられ正当化されるというようにである。

したがって、ミースにおける、「圧倒的な全体があるか、細部の単なる集積があるかという両極端だけが存在し、その中間の調和のとれた部分-全体関係が失われている状態」[41]というのは、けっして「部分と全体の有機的関係の喪失」[42]を指す[43]のではなく、むしろ「部分と全体」とが同一の原理に基づく存在であるということの証左なのであり、他方で、その資本という社会（編成）原理を産み出す場面形態は捨象されているということなのである。

つまり、いずれの意味においても、現存在としての人間個々人のバウエンに対する主体性は捨象されているのであり、よって、自己産出運動であり自己形態化運動であるはずのシステムにとっては、根源的な産出主体ないしは自己は、現存在ではない「他」を具現するものとして存在することになるのである。

これに対して、現実に生きて活動する人間個々人を、抽象的な意味で自由な存在として前提したとき、モダニズムと特徴づけられる建築様式にあっては、それは、コルビュジェに代表されるように、建築し、その建築（物）を使用・消費する主体としての人間個々人と、その客体としての建築（物）は、「主－客」二元論的に位置づけられていた[44]。

こうしたコルビュジェのような理論構成に対して、客体とは主体の在り方であり、主体とは客体に自らを対象化する運動体であるとして、このような「主－客」二元論を打破し、つまりは建築におけるモダニズムを乗り越えようとしたミースにおいては、上述したように、社会的諸形態における存在様式の（部分と全体などという）対比に基づくかぎりでは、現に存在する社会システムの自己産出運動あるいは自己形態化運動の様相を捉えることはできても、その諸形態を産み出すという意味での根源的な主体からの産出の仕組みを理論的に内在化すること[45]はできなかったのである。

言い換えれば、２世界論的な二元論的把握に対してミースのように一元化することは、それが、生きて活動する、社会形成主体である人間個々人に一元化するものでないかぎりは、この人間個々人によって産み出される社会というシステムを主体として、これに一元化することとなる。しかし、この一元化は、その二つを主体とする二元論的構造（つまり「転回」する構造。）に基づいているが故に、悪無限的に交替・反復を繰り返すものである。

それゆえに、ミースの「決断することを決断する」という「精神的決断」を建築において空間的に表現するという思想[46]は、（自己目的化した原理である）資本という社会システムの悪無限的な自己産出運動の地平に留まるこ

ととなり、社会的諸形態とその関係を産み出す「根源的な主体」である人間個々人は、思想や理念という意識の形式において存在する抽象的なものとなってしまっている[17]。

それでは、こうした、ミースのような「建築のモダニズム」は、他の建築家によっては解決を試みられていないのであろうか。

ここでは、さしあたり、建築における非合理主義の象徴的存在とも評価されることもあるアントニオ・ガウディについて探ってみることにする。

Ⅲ　ガウディに観る合理性と非合理性の統合

さて、ガウディ[1]もまた、コルビュジェらのように、建築のモダニズムや、それ以降の建築の発達に影響を与えた人物である[2]（図６参照）。

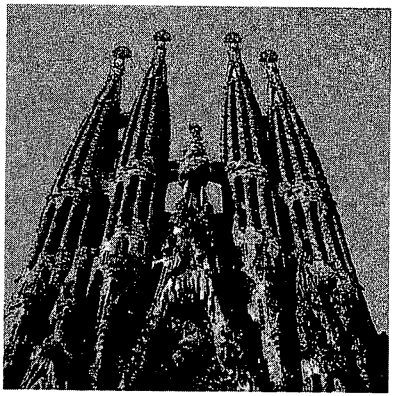
鳥居徳敏氏によれば、ガウディは、構造的合理主義であるとともに構造的非合理主義であり[3]、自然法則を重視し光と多彩色を活用し、歴史主義であり、幾何学主義であるとされている[4]。造形に限って、歴史主義、自然主義、幾何学主義を、「ガウディ造形の三段階」と呼ぶこともある[5]。

さらにこのガウディは、「作品には論理性の側面」が「つねに見られ」る「完全な合理主義者」[6]であり、その作品は「自然の観察と経験知を最大限に生かした論理的で熟知された工法を基礎に直感されたものである。」[7]

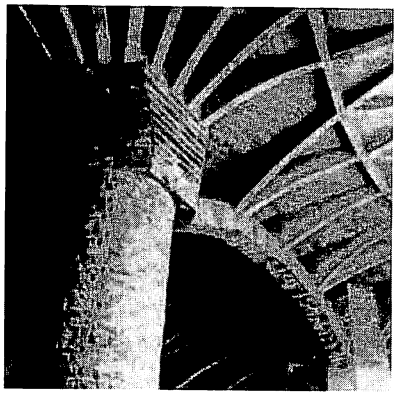
その工法のパターンは、①モデュール化、②ラセン組成、③滑らかな形態、④双晶化、⑤空洞化、⑥解剖、⑦フラクタル性、⑧自己相似の８つであるとされている[8]（図７参照）。

そしてブグザデーとマルガリートによれば、「双曲放物線面と双曲線面が彼の建築を特徴づける要素となる。」[9]

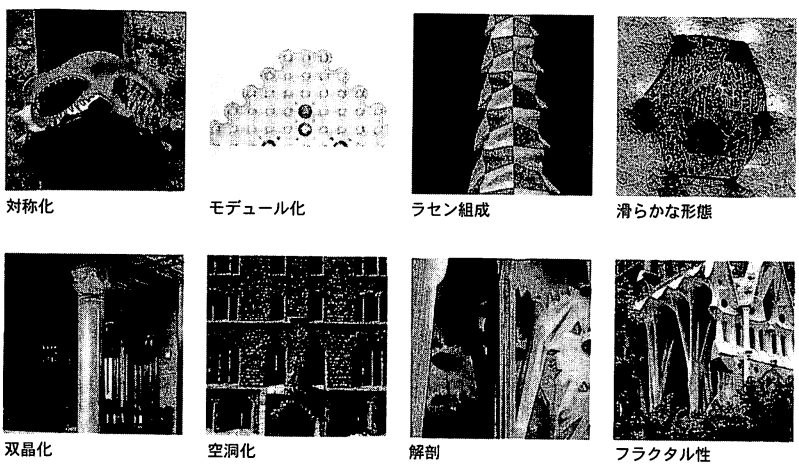
また、これら建築の構造を決定するものは、「図解力学および逆吊り（逆さフニクラ）模型…を基本に探求された」[10]カタロニア・ヴォールトである（図８参照。）。これは、磯崎氏によれば、「天井の二点から糸を吊り、その点



【図６】サグラダ・ファミリア聖堂
－出典：『ガウディ　かたちの探求』68頁－



【図８】コローニャ・グエル教会堂出典
－出典：『ガウディ　かたちの探求』82頁－



【図７】ガウディの工法パターン
－出典：『ガウディ　かたちの探求』45頁－

上に荷重となるおもしを下げ、位置と重量を調整する。その結果糸の描く姿は、これらの荷重を天井に伝えるのにもっとも合理的な形を描いてくれる。その糸を数多く吊るとひとつのシルエットが生まれるが、これがもっともすなおな力学的なバランスをもつ形態」となり、「これを一気にひっくりかえ」し「重力の方向を逆転する」と「引っ張り材としての吊り糸がここでは圧縮材としての柱または壁のリブに転換する」[11]という次第である。それはガウディが、「石造アーチに、不可欠の控壁や擁壁をとりはらう形式を探したあげくに、内部応力の流れの方向と一致する放物線を発見した」[12]ことに因る。そして、構造体の決定だけではなく、ガウディに特有な形態は、すべて、このカタロニア・ヴォールトという工法に依っており、これがガウディを貫く形態決定要因であったと考えられる[13]。

こうした方法的な手続きと結果とをもたらしたのは、ガウディの「通念として形式化していた古典主義的な建築の概念に、最初から否定の姿勢でのぞんでいた」[14]というあり方である。磯崎氏は、ここに、「あえて美しくない形態をそれが合理的であるという理由で採用する」[15]というガウディの手法を見出している。

こうした手法により、ガウディは、「構造形式を探求し、土着の工法をひろいあげ、徹底的に合理的な空間をつくりあげながら、その細部を無限に変幻するメタフォアで埋めつくす」という「まっとうな建築家としての方法」[16]を取っていたことになる[17]。

この方法により、近代建築では区別されていた構造躯体とそれ以外の部分が、ガウディにおいては「すべてが唯一、同一のものと化して」おり、「このことが…観者に向けて作品の隠れた部分、すなわち肉厚の造形の中に何かを直観し得るような機会を授け」[18]ることになるのである[19]。

磯崎氏は、建築家として、この建築の隠喩（メタファー）に関し、「建築が圧倒的な迫力をもってみずからの存在を主張できるのは、社会的、技術的、歴史的、芸術的などのあらゆる領域における通念化した枠組み、すなわち制

度の突破される瞬間を持ち得たときだけである」[20] と、その機能を見出している。

では、その磯崎氏が「建築のみならず家具までを、動力的な有機的な構成体として発想していた」[21] とするガウディは、建築（物）に何を意味させようとしていたのか。

隠喩を主観的に意味づけるのは、それを「解釈」[22] する主体たる個人であるが、隠喩を客観的に意味づけるのは、言い換えれば内容規定するのは、比喩されるべき物事を産み出す、生きた人間個々人の活動・行為である。

すると、上述した磯崎氏の文言を経由すれば、ガウディの中に、生きて活動する人間個々人が構成し客観的に対象化する客体としての建築（物）を見出すことができよう。たとえば、延藤は、ガウディの作品である「カサミラの中庭やライトウェルも、他者の存在をなにげなく感じさせる気配をもっている。これらの集合住宅の住戸の入口扉は、サルバドール・ダリが『子牛の皮のように柔らかいドア』と絶賛したように、生命感漂う表情にみたされている」[23] と述べている。

これを「有機体」ということで言えば、「ガウディの作品には、集まり住みあうフィーリングの高揚を促す空間の企みがはりめぐらされており、そのことによって人びとは、『生の海』に身をのりだし、精神と身体のつらなりを感じとる」[24] のである。

このようにガウディの建築（物）を観るならば、そこには、コルビュジェのように止揚されない「主体－客体」関係を前提とする[25] こともなければ、ミースのような越えるに越えられない社会システムの悪無限的自己展開構造もない。ガウディは「建築という無機物に自然という有機物を結合させるという創作態度をとった」[26] がために、それらを繋ぐ、生きて活動する人間も浮かび上がることとなり、したがって、ここに、「自然－人間－社会」という連関[27] が、その建築理念において保持されているということになるのである。

ここでは、人間が社会に解消されることもなければ、自然に解消されることもない。自然と人間と社会との各々が、それぞれの独自な存在を保持しながらも、同時に、建築の形式、建築物の素材、それらの成果としての建築物と人間との一体性という形で融合し合っている。

この場合、人間存在の独自性が保持されるということは、同時に、(たとえばコルビュジェのような)抽象的な意味での人間ではなく、また（ミースのような）「意識」としての人間でもなく、まさに有機的存在として、自己の自然・環境との統一化運動[28]を、常に自らの生きること、活動することを通して行っている、個々人としての人間が想定される。まさに、「ガウディの建築の本質は、何ものかに仕えるところにあるのではなく、その何ものかと『ともに在る』ところにある」[29]ということになるのである。

そして、このように把えることのできるガウディの建築理念に対して、延藤氏は、つぎのように述べている。すなわち、「ガウディの集合住宅には、スマートな個体性と豊かな共同性を創造的にゆるやかに結びあわせ、集住精神を触発する形態の不思議さがある」[30]と。

とはいえ、そういったガウディの長所・功績にもかかわらず、ガウディもまた、建築のモダニズムを乗り越えたとは言えないものと考えられる。

なぜならば、ガウディの建築においては、人間と建築物とが自然という共通の土台の上で有機的とでも喩えうるように統一されているのであるが、これは、一方で、人間個々人が建築物を使用・消費するということで建築は完成・実現されるということであり、他方では、その個々人の不断の使用・消費により、建築も日々更新されるということであるからである。

つまり、一方では、消費もまた生産であるということ[31]を提起し、その実践へと人間を導くような、現代社会の最前線にある論点の提起と解決法とが、ガウディによって示されているのであるが、このことは、現代社会の生産様式の変更、つまりは資本というシステムに変更をもたらさないかぎりは、解決しきれない事柄であるからである。

言い換えれば、現代社会のシステムであり、その原理である資本というものを変更させるものでないかぎりは、それは、あくまでも問題提起ないしは異議申立てに留まるのであり、この点でモダニズムへの有効な批判たりえても、モダニズムを否定し、それを乗り越える方途を示したとは言えないのである。

また、もう一方では、ガウディにあっては、個々人の不断の使用・消費が建築物の「バウエン」を進めて行き建築を日々更新させるということになるが、これは、ガウディにおいては、建築物は、建築家を含めた建築の直接的実行行為者によっては完結しないということになるからである。

つまり、このような、完結しない建築は、理論的にも、建築から都市のあり方へと展開しうるものではなく、しかも、建築物は私的所有対象であるということからすれば、私的所有という枠内での私的所有の具体的な在り様を変更するものでしかないからである。

言い換えれば、ガウディの建築物は、新しい集住のあり方までも提起するものであったとしても、どのようにすれば、現代社会における諸都市が、それぞれにおいて新しい集住のあり方まで含めた人間個々人の生活環境を提供しうるのかを明示するものではないのである。

それゆえにガウディも、「初期には華麗な合理主義建築の表明があったとはいえ、今日の我々の都市空間を形作ってきたところの単調と諦観に至る道から離れることを自らに義務付けた」[32]のであろう。このことは、建築のモダニズムの忌避ではあっても、それを否定しきるということまで意味するものではない。

言い換えれば、自らの建築の徹底においては、建築のモダニズムの展開の上に位置づく都市の在り様を否定し、より高次の次元での都市論を構想・展開するものではないということである。

つまりは、ガウディにあっては、個別の建築物において人間と社会と自然との有機的とまで言いうる連関を提示し、そういう面において建築物の個別

性を越えた普遍的なものの提示は可能ではあっても、建築群、さらには都市というものに対する理念の形成という、人間個々人と社会とを繋ぐ中間媒介項の論理は展開しえないと言うことになるのであり、また、したがって社会のあり様の変革を提起するというところまでは行かないのである。

以上のような点で、ガウディもまた、モダニズムを乗り超えたと言うことはできないと考えられる。

そして、それは、ガウディの精神を受け継ぐ時代と社会とに生きる人々の課題と言えるであろう。

Ⅳ　建築のモダニズムからの超出
－これからの都市計画や「まちづくり」を求めて－

さて、大川三雄氏によれば、「教条主義的で禁欲的なモダニズム建築への反動から生まれたポスト・モダニズム建築は、モダニズムが定式化している諸要素、たとえば規則性や無装飾性などを逸脱することを目的とし、表現の豊かな展開をめざすものであった。その造形的な特徴としては、複数の様式の共存、曲線や色彩や装飾といったものへの再評価、象徴的形態や歴史様式の引用、そして地域様式の復活といった点があげられる。」[1)]

とはいえ、前章までで見たような建築のモダニズムの展開と、それを乗り越えようとした試みから言えることは、様式の変更に留まるものではない。にもかかわらず、モダニズムが終焉していない現状では、「ポスト・モダニズム建築」を提示しても、建築のモダニズムを乗り越えたことにはならないのである[2)]。

また、この建築のモダニズムの乗り越えは、たとえばイギリスはレッチワースの先駆的な「田園都市」に具現したハワードの都市計画[3)]ないしは都市デザインの提示によって行われるものでもない。

ただし、相田氏と土屋氏に拠れば、「都市のモデルと具体的な造形との乖

離的な印象を再統合しようという」[4] 意味での都市デザインという観点からハワードを見れば、それは「現代の問題として抱えている状況がつくり出されるに至った原初を見るということである」[5]。

それは、つぎのような指摘からも了解できる。すなわち、「『田園都市』は健康的な生活と産業のために設計された町である。その規模は社会生活を十二分に営むことができる大きさであるが、しかし大きすぎることなく、村落地帯で取り囲まれ、その土地はすべて公的所有であるか、もしくはそのコミュニティに委託されるものである」[6] が、相田氏と土屋氏に拠れば、「ハワードの考えた都市は、全く景観を問題にしておらず、もっぱら視覚化されていないレベルで、都市を成立させているシステムのモデルプランとして示されて」[7] おり、「ハワードの提案によって、都市をとらえる視点はそれまでの領域から大きく展開したのではあったが、このことは逆に、都市を計画する際に、視覚的あるいは空間的な、身体に密着した側面が等閑視される傾向も招き、やがてモデルを提示する都市計画と空間性を重視する建築的な計画とは別々であるかのような印象もつくられてしまった」[8] というものである。

このような都市計画は、ミースのような建築や都市計画には批判として有効であろう。だが、「身体に密着した側面が等閑視される傾向」にあるのであれば、ガウディのような建築（物）と人間個々人との有機的とも例えることのできる関係を主張する立場からは批判されるであろう。また、「モデルを提示する都市計画と空間性を重視する建築的な計画とは別々であるかのような印象」を持つのであれば、人間を取り巻く空間の在り様から建築や都市を設計していくコルビュジェのような立場からも批判されよう。

やはり、自然との連関、および社会との連関、そしてその相互連関の中で関係を産み出す主体として存在する人間個々人の、生きて活動することを基点としたものであるかどうかが、これからの人間と建築との関係や、人間と都市との関係を考えていく上で重要であると考えられる。

そして、コルビュジェのような二元論的建築論・都市論でもなく、ミース

のような社会システムの悪無限的自己展開構造に巻き込まれてしまうのでもなく、ガウディのように自己完結しない有機的構造という矛盾の根源を問わないのでもない、新しい建築や都市計画の在り様は、生きて活動する人間個々人を基軸に据える[9]ことで、今日的な社会的関心事でもある「まちづくり」に連結するものである[10][11]。

さらに、このような建築・都市計画・「まちづくり」は、デカルトに始まる「主－客」二元論的存在様式の問題提起に応えるものであり、その「主－客」二元論的存在様式を意識の現象様式とすり替えてしまう、現象学その他、現代的諸思想・諸科学を批判し否定するものでもある。したがって、それは、現代社会を乗り越えるためのものでもあるのである。

また、このような文字通りの実践こそ、意識の自己内循環や知的枠組みの単なる組み換えや変更に留まらずに、現代に生きて活動する人間個々人の在り様や生活様式、あるいは社会的生産体系に変更を迫るものである。

この点で、以下のようなピーター・ブレイクの検討は、一瞥に値する。

ブレイクは、「近代建築に代わるものはどのようなものであろうか？」[12]と問いを立て、それに対して、代替策[13]として、①高層ビル建築のモラトリアム[14]、②現在存在するすべての建築の取り壊しのモラトリアム[15]、③すべての先進国における新しい高速道路の建設[16]のモラトリアム、④建設業がその製品の性能に対し責任を負うことを義務づける法律をつくること[17]、⑤ゾーニングのモラトリアム[18]、⑥これまで唱道されてきた（そしてごく稀にしか実施されなかった）巨大な計画を縮小し、人間が理解しうる尺度で計画を立てること[19][20]、あるいは全く計画しないこと、⑦建築教育の根本的な再編成、⑧建築自体のモラトリアムを挙げている。

これらの中には、すでに一部が実現されつつあるものもある。そして一番重要で他のものの基盤となるのは、⑥のような、現実に生きて活動する人間の、自らの生活・労働の行為の中で感性的または理性的に関わることが可能な都市ないしは建築の計画ということである。このことは、本稿が導出して

きたこととストレートに合致する。言い換えれば、本稿で展開した内容の帰結は、ここに理論的な支持を得ることができるということである。

さて、こうした近代建築の代替案を提示したブレイクは、近代建築に関して、以下のように総括している。すなわち、「近代建築運動が始まったとき、それはいくつかの共通の理想を宣言した。民主的集団主義、工業化、機械化への忠誠、都市への忠誠、そして未来への忠誠がそれであった。それは立派な試みだった。…しかし現在は…近代建築家の多くにとっても決定的に重要な時なのだ。私たちは未来をすでに見、そして生きた。そしてこの未来は機能しないことが判った。近代建築運動――私たちがそのなかで育まれ、私たちが職業生活において忠誠を誓ってきた信条――は一つの終わりに到達したのだ」[21] と。

ここでブレイクが「未来」と呼ぶのは、本稿の趣旨において転換すれば、現代において近代建築のモダニズムに基づいたり、あるいはそれを批判・否定する建築家たちが、現代社会の中に見た未来社会の理念（理想）であり、それがモダニズムないしは、その反対者に留まるかぎりは、その理念（理想）も各々の建築家の個性という形を取り、この個別性のゆえにストレートには普遍性を提示せず、むしろ新しい社会のあり方を希求する人々からは、現代社会に普遍的な〔未来社会の〕理念（理想）の対極にあるものと把えられてしまうのである。

本稿も、コルビュジェ、ミース、ガウディの検討を通して、彼らの個性という形を取って現われた理念の内容を汲み取り、その結果、モダニズムが浸透している形での理念（理想）ではなく、理念（理想）がストレートに現われ出ている形での理念（理想）の把握と構想とを目指すものであった。

なぜならば、モダニズムの浸透する形での理念（理想）とは、現代社会の原理（資本）に体現されているからであり、本稿も含めて現代社会において本質的に志向されるのは、理念（理想）が現代社会に特有の形で（疎外されて）現われ出ていることではなく、ストレートに理念（理想）を原理とし体

現している社会であるからである。

そして、その理念とは、先にも述べたように、自然との連関、および社会との連関、そしてその連関相互の連関の中で関係を産み出す主体として存在する人間個々人が生きて活動するということをストレートに基点とする社会形成の原理である。

それゆえ、その諸形態としての「まち」・都市・建築（物）とはどのようなものかが問われるのである。

その具体的実践的検討は、今後の課題として本稿をひとまず終えることにする。

以上

注

0

1）今日では、「リノベーション」という形の建築物再生様式などが、注目を浴びている。この点に関しては、梶尾恒夫編『ストック時代の住まいとまちづくり　スクラップアンドビルドをのりこえて』（彰国社，2004年。）などを参照。

2）たとえば、チャールズ・ジェンクス『ル・コルビュジェ』，佐々木宏訳，鹿島出版会，1978年，142頁参照。また、相田武文氏と土屋和男氏は、アメリカはニューヨークのマンハッタンを例に取り、この点に関して、次のように示唆的に分析している。すなわち、マンハッタンの「大公園と超高層ビルの連続は人工的なランドスケープとなっているのである。…建物はセントラルパーク以外のマンハッタンを埋めつくし、地面がいっぱいになると、今度は上へ上へと階を重ね、いわば敷地を拡大していった。ここにみられる、常に終わりを予期しながら、いつまでも終わることのない建設という運動は、実はこれを支えた資本主義の構造になぞらえることができる。…ロックフェラーセンターは資本主義の仮借のない

実利追求と都市デザインの公共性が両立した類い希な例である。それはマンハッタン・グリッドの三ブロックをまとめて開発した総合計画の最初のものであり、一九棟のビルとそれらに囲まれたプラザからなる。」（相田武文・土屋和男『都市デザインの系譜』，鹿島出版会，1996年，122頁～124頁。）

3）「モダニズムの建築は、欧米各国の先鋭的な建築家たちによって推進されたが、そのなかでももっとも強力で影響力の大きかった存在がル・コルビュジェ（1887～1965）である。」（吉田鋼市「モダニズム建築の成立(2)－フランス、イタリア」，大川三雄・川向正人・初田亨・吉田鋼市『図説　近代建築の系譜　日本と西欧の空間表現を読む』（彰国社，1997年）所収，168頁。）

4）「ミースの建築の特質は、単純な形式、モダンな材料というかたちで一般化してしまえば、容易にコピーし得るものだったし、またそのようにして『近代建築一般』というものが、とりわけアメリカでは普及していった。」（八束はじめ『ミースという神話　ユニヴァーサル・スペースの起源』，彰国社，2001年，298頁。）

5）「〔20－引用者〕世紀の終わりになって、今世紀（20世紀－引用者）を決めた建築家は、ミース・ファン・デル・ローエとル・コルビュジェの二人にしぼられつつある」（磯崎新『ル・コルビュジェとはだれか』，王国社，2000年，10頁。）。

6）「現在の都市風景に見られるこの〔模倣の－引用者〕流れの最大のものは、ルードビッヒ・ミース－ファン－デル－ローエ…という近代建築の巨匠の作品…を原典とする、オフィスビル群である。……同様な流れは、ル・コルビュジェの『ユニテ・ダビタシオン』…をオリジナルとする、郊外の団地群の風景についても指摘できる。」（森川嘉一郎『趣都の誕生　萌える都市アキハバラ』，幻冬舎，2003年，236頁。）

I

1）本稿では、“Modern Society”の日本語表現として「現代」という用語を用いるが、「近代建築」などという用語または固有名詞の場合には、“Modern Society”を意味していても「現代」と言い換えることはしない。従って以下では、“Modern Society”を意味する表現としては「現代」と「近代」とが並存することになるが、本稿では特に区別するものではない。

2）磯崎・前掲書，44頁。なお、磯崎氏によれば、近代建築の多様な運動をまとめて、十把一からげにアメリカに輸入したのが1932年にニューヨーク近代美術館が「近代建築」という名で行った展覧会であった（磯崎・同上書，44頁参照。）。この展覧会では「ミースもコルビュジェもグロピウスも、J・J・P・アウトも…バウハウスに所属していた人も、オランダでやっていた人たちも、実は大きい差異を相互にもっていたのに、一つのスタイルとしてそれを『インターナショナル・スタイル』と呼」ばれたのであった（同上書，45頁。）。しかし、その中で、「いわゆる近代建築の三原則（ヴォリュームとしての建築、規則性をもつ建築、装飾忌避の建築）」（同上。）が導出されたのであった。

3）吉田・前掲文献，166頁。

4）同上。

5）同上。

6）同上参照。

7）同上文献，167頁。

8）同上。

9）ル・コルビュジェは、1923年に『300万人のための現代都市』計画案（後で詳述。）を発表し、1925年頃には『近代建築の五つの要点』（①ピロティ、②屋上庭園、③自由な平面、④横長の窓、⑤自由なファサード）を発表した（同上文献，169頁参照。）。そうした一連の経緯により、「モ

ダニズムの建築は、欧米各国の先鋭的な建築家たちによって推進されたが、そのなかでももっとも強力で影響力の大きかった存在がル・コルビュジェ（1887～1965）である」（同上文献，168頁。）と言えるのである。「彼の建築、都市計画、および言説は近代建築史上最大の影響力をもったし、今なお持ち続けていると確信できる。」（相田・土屋・前掲書，110頁。）

10) 吉田氏によれば、「ペレ（1874～1954－引用者）は…鉄筋コンクリート造による柱・梁構造の典型例をつくりだし…鉄筋コンクリート造のアーチとシェル構造の典型例をつくりだした。…ガルニエは、その『工業都市』計画案（…原案は一九〇四年）において、鉄筋コンクリート造の建物でのみ構成された都市を提示し、きたるべき社会における鉄筋コンクリートの可能性と普遍性を鮮やかに主張した。なお、用途によって地区を分けるゾーニングの発想など、ガルニエの近代都市計画における貢献も忘れてはならない。この二人がル・コルビュジェをはじめとする、いわゆる近代建築の先駆者たちに与えた影響ははなはだ大き」（吉田鋼市「鉄筋コンクリートの登場と普及」，大川他・前掲書所収，157頁。）いとされている。

11) コルビュジェ自身の設計通りに実現された建築物は、そう多くはない。『300万人のための都市計画』を初めとする数多く提案・発表された彼の都市設計のプロジェクトは、「首尾一貫しており、プロトタイプのヴァリエーションと考えてよい」が、「それがひとつだけ実現したのがマルセイユのユニテ・ダビタシオンなのである。」（相田・土屋・前掲書，112頁。）また、「彼は鉄鋼による量産住宅を数回にわたってデザインしているが、しかしそれは『正しい精神が存在しない』故に受け入れられずに実現しなかった。彼が実際に建てることのできたガラスと鉄鋼の住居の数少ない例は二棟の集合住宅であっ」（ジェンクス・前掲書，208頁。）た。とはいえ、重要なのは、本人の手による実際の建築物の数ではなく、

「近代建築史上最大」と言われる、その影響力である。

12) 川向正人「モダニズム建築の成立(1)－ドイツ、オランダ、ロシア」，大川他・前掲書，159頁参照。

13) ル・コルビュジェ『輝く都市』，坂倉準三訳，鹿島出版会，1968年，51頁。また、「鋼鉄は、十九世紀の重工業によって産み出された形鋼によって強度の問題と経済的必要とに解決を与え、今や単独に用いられることもあれば、鉄筋コンクリートと一緒に用いられることもあるようになった。鉄筋コンクリートは、性質の全く逆な異質の材料（鋼とコンクリート）を一緒にして、一つの物体に働く二つの相反する力、すなわち引張（力）にも圧縮（力）にも耐えられるようにしたもので、最新の技術の中でも最も微妙で最も精密でしかも最も経済的なものなのである。」（同上書，51～52頁。）

14) カルラス・ブグザデー＆ジュアン・マルガリート「構造（ストラクチャー）と空間」，ダニエル・ジラル・ミラクラ，ジュアン・バセゴダ・ノネール，クラウディア・アルシナ，ジュゼップ・ゴメス・セラーノ，カルラス・ブグザデー，ジュアン・マルガリート，ジュゼップ・リュイス・ゴンサーレス，アルベルト・カザルス，ジョルディ・ボネット・イ・アルメンゴール＆サンティ・バルジャウ＋鳥居徳敏（日本語版のみ）『ガウディ　かたちの探求』，読売新聞東京本社，2003年，63頁。もっとも、これにより、「単調さが、かつて経験したことのないほど強大となった一時代が幕を開け、高層建築はもはや“上昇する”のではなく、ただ積み重ねられていった」（同上。）のではあるが。

15) コルビュジェは、「建築形態をア・プリオリに幾何学形態と決めたうえで、建築を機能させるために、その幾何学形態を組み合わせたり、変形したり自由に操作した。」（川向正人「有機的建築(2)－ヨーロッパ」，大川他・前掲書，186頁。）

16) 富永譲『ル・コルビュジェ－幾何学と人間の尺度－』，丸善，1989年，

73頁。

17) 同上。

18) コルビュジェ・前掲書，88頁。

19) その直接の理由は、つぎの言葉に明らかである。すなわち、「独立住宅は、都市をつくるものではなく、むしろ破壊するものだと私は考えてきました。独立住宅など、騒音やゴミや犬の糞とともに地上に住みたがる人々の大いなる幻想です。この問題をあらゆる点から検討した結果、一家族を満足させる独立住宅よりも、都市計画を検討すべきであることがわかったのです」（コルビュジェ自身の言葉，ジョン・ピーター『近代建築の証言』，小川次郎・小山光・繁昌朗訳，TOTO出版，2001年，188頁。）というものである。

20) この点に関しては、コルビュジェ自身の、科学技術の発達のゆえに輸送手段に頼るというよりも、その逆の志向性も関わっている。すなわち、「重要な点は、大群衆の移動をなくすことにあります。このこと〔大群衆の移動－引用者〕は…そうとは知らずに服従している社会から、結局のところ簒奪を行っているのです。」（コルビュジェ自身の言葉（前掲），186頁。）したがって、「散在する都市と、一ヶ所に纏められた都市と、どちらを選ぶかという公開裁判において、勝利の判決がどちらに下るかはおのずから明らかであろう。そして、それは、交通の問題においては、町で公園の中を歩いて散策するか、あるいは毎日一時間、二時間、三時間を遠くからの機械輸送に捧げるかという、進歩のもたらした二つの考え方のいずれを選ぶかということなのである」（コルビュジェ『輝く都市』（前掲），110頁。）というものである。

21) つぎのような文言も、こうしたコルビュジェの志向性を示すものであろう。すなわち、「新たな科学技術が自由をもたらします。今や、昔では考えられなかったところに行ける、つまり地平線は征服されたのです。高速道路を建てることで、ほかの家々しか見えない風景のかわりに、数

エーカーにもわたる土地を解放することができます。こうしていけば、緑に覆われた風景を、自宅に居ながらにして楽しむことのできる都市が生まれます。この場合の窓は、もはや、窓（window）などとよぶことはできません。柱間、柱廊といってよいほどの大窓（bay, loggia）です。素晴らしい眺望が得られます」（コルビュジェ自身の言葉，ピーター・前掲書，186～187頁。）というものである。

22) ブグザデー＆マルガリート・前掲文献，63頁。ブグザデーとマルガリートに拠れば、「美学と構造との関係は、建設のためのシステムが支配的となり、体系的に用いられるようになると失われる。現代社会に立ち並ぶ高層ビルのオフィスやアパート群がその典型である。そうした建築の初期段階において、建築は自由への参加であると主張したのがル・コルビュジェ」（同上。）なのである。

23) 言い換えれば、それは、当然にも、建築物の機能なのではない。コルビュジェ自身は、この点について、たとえば次のように述べている。すなわち自身の課題として在るのは、「現実に生活している人間を考察し、以下の四つの一番大切な機能を、それぞれ最もよく満足させる方法を考える。その四つの機能とは、居住　仕事　心身の育成　交通　の四つである。」（コルビュジェ・『輝く都市』（前掲），242～243頁。）

24) 相田・土屋・前掲書，112頁。

25) それは、「一、住居単位（住宅および住宅の延長）二、仕事単位（a）都市では－仕事場、工場、事務所、交換場所。(b)農村では－農地単位。三、休息、娯楽の単位。四、交通単位」（コルビュジェ・前掲書，84頁。）というように構想されている。

26) サロン・ドートンヌ，パリ，1923年。

27) 川向正人「住宅団地の形成と近代の都市づくり」，大川他・前掲書所収，198頁。

28) この場合、「有機的」というのは生物学的な意味ではなく、人間の「延

長」として、人間の有機的身体とストレートに統一されているという意味である。

29) 「機械の力は、量産と、さらにその生産物分配の手段までもたらしていたというこの驚くべき事実。――今や、過去に戻るか、ことの自然のなりゆきを素直に認めるか、いずれか二つに一つの道を選ばねばならない時だ――あらゆるもの、あらゆる力を駆使することができる。機械、輸送力、工業組織、行政管理の力、純粋科学、応用科学など、これらはすべて現在すでに存在しているものである。これから努力すべきことは、現在の社会を不統一から救い、それを調和へと向けることである。世界は今、調和を必要としており、調和をもたらす人々の手によって導かれることを必要としている。」（コルビュジェ・前掲書，10頁。）

30) 磯崎・前掲書，58頁。ただし、氏は、それを「幼稚なユートピア」（同上。）と断じている。

31) 設計の思考自体は、コルビュジェ自身の手によるリオ・デ・ジャネイロの都市計画の冒頭に描かれた４枚のスケッチなどによって、まず①風景、つぎに②そこに木などが加わり、さらに③そこに人間一人が家具と共に加わり、最後に④人間と風景とを隔てるものとしてのウインドウと壁が描き足される、という形で進展することは、これまでにも指摘されてきた。この点に関しては、たとえば、相田・土屋・前掲書，115頁参照。

32) 相田・土屋・同上書，113頁。

33) 同上参照。

34) 同上。

35) 同上。

36) この点に関し、フィリップ・パヌレらは、こう指摘している。すなわち、「コルビュジェの敷地に対する無関心は、風景を前面にした見世物的な構想によって隠蔽されることが多い。その具体的理解には、まず土地に目を向ける必要がある。輝く都市が名前も場所も持たないのと同様、ユ

ニテ・ダビタシオンは土地を持たず、土地を拒否し、そこから離れ、そしてピロティのうえにとどまり抽象化する。…ピロティとは単に建物を持ち上げて可視化する方法であるだけでなく、コンセプト・レヴェルの純粋思考以外の関係を拒否してしまう」（フィリップ・パヌレ，ジャン・カステス＆ジャン・シャルル・ドゥポール『住環境の都市形態』，佐藤方俊訳，鹿島出版会，1993年，153頁。）と。

37) この点に関しては、富永氏のつぎの指摘も示唆的である。すなわち、「近代の正統的な機能主義が使用の問題を扱い、要素の関係が人間に及ぼす心理的効果の抽象的分析と定式化という道を辿ったのとは逆に、ル・コルビュジェがその要素となる具体的な形の言語や用法の提出に重点を置く一方、それらの関係が必ずしも明瞭に扱われなかったことは注意を惹く。そうした事柄は個人がそれぞれの条件のなかで全力を挙げて解決してゆくのだと言っているかのようである」（富永・前掲書，59頁。）という指摘である。

38) この点に関しても、コルビュジェ自身も気づいていたことは、つぎの言葉から看取できる。すなわち、「一家族を満足させる独立住宅よりも、都市計画を検討すべきである…大いなる束縛にも、大いなる自由にもなり得る集合住宅を検討するということ」（コルビュジェ自身の言葉（前掲），188頁。）なのであった。

39) この点に関しては、パヌレらが、コルビュジェに則して具体的に指摘している。すなわち、「従来の都市組織に秩序を与えていたシークエンスが、ここ〔ユニテ・ダビタシオン－引用者〕に至り建築次元の解を経由してついに消滅してしまう。正面の対立はもはや存在せず、階段室の垂直のサインが東側ファザードを西側のそれと区別する。この中立的空間の内部で無用のものと化した成長・変更の現実的可能性は、住戸内部に封入されてしまう。種々の議論を呼び起こしながらもピロティは不毛のまま放置され、道路から切り離されて旧来の設置階部分の役割を果たす

ことなく、歩行者に土地を戻すという当初の論理との矛盾を呈しながら徐々に駐車場に姿を変えていく」（パヌレ他・前掲書，158～159頁。）と。

40）この点に関しては、コルビュジェ自身も、自らの論理の帰結において問題となることを自覚していた。すなわち、「土地所有が細かく分割されているため、近代技術の可能性に基づいて考察された全体的な解決が全く不可能となっている。従って、この問題を解決するには、土地の収用と、所有権、および集団管理の確立という手段に訴える他はないのである」（コルビュジェ・前掲書，261頁。）と。

41）隅研吾『新・建築入門－思想と歴史』，筑摩書房，2002年，27頁。

42）富永・前掲書，52頁。

43）川向・前掲文献，199頁。

II

1）たとえば磯崎・『ル・コルビュジェとはだれか』（前掲），10頁参照。

2）川向正人「住宅団地の形成と近代の都市づくり」（前掲），198頁参照。

3）同上。

4）同上書，198頁。

5）これを具体化・実現すると、たとえば「生産の標準化、規格化の面から考えられた骨組みとそれにかぶせられた軽いプレーンな壁面という工業的な材料と構法の追及、それによって成立する幾何学的なデースブルクやマレウィッチの抽象的構成に似た形態、装飾のための付属物の代わりに材料のテクスチュアや色彩からかもし出される室内の新しい装飾性、大きな空間を軽い仕切りや床高の変化や天井と壁の仕上げや家具や細い柱で空間的に分割する室内構成」（山本学治・稲葉武司『巨匠ミースの遺産』，彰国社，1970年，53頁。）などとなる。

6）田中純『ミース・ファン・デル・ローエの戦場　その時代と建築をめぐって』，彰国社，2000年，52頁参照。

7）同上。この点に関しては、たとえば、デイヴィッド・スペース『ミース・ファン・デル・ローエ』（平野哲行訳，鹿島出版会。）の54頁にも同様の指摘がある。

8）田中・前掲書，52頁。

9）同上。

10）同上。

11）同上書，52頁および53頁参照。

12）スペース・前掲書，225頁。

13）田中・前掲書，53頁。

14）「ミースによれば、バウクンストとは不可視の時代意志の空間化である。そして、具体的にそれはガラスや鉄筋コンクリートという物質によって具現化される。これらの物質が時代意志を担い、つまり、物質それ自体が精神化されたところにバウクンストは成立する。」（同上書，56頁。）この点に関し、ミース自身は、こう語っている。「私は建築に取り組んでいるのではなく、言語としての建築に取り組んでいるのであ」（ミース自身の言葉，ピーター・前掲書，214頁。）ると。言葉によって精神が語られるときに、その精神が社会的なものであるならば、それを語る言葉も、社会的諸形態の限りでヴァリエーションを持つ。ミースの場合は、それが建築なのであろう。「建築家は決して主観的にはなれません。」（同上書，218頁。）

15）田中・前掲書，250頁。

16）同上。

17）これは、観点を変えれば、「ミースの実践〔とはー引用者〕……基本的なロジックをその条件に合わせて改訂＝差異化しながら反復していった」（八束・前掲書，311頁。）ということになろう。

18）それゆえに、ミースにあっては、「技術とは生成の途上にあるバウクンスト」（田中・前掲書，250頁。）のことであり、この「バウクンストは

技術のこの展開過程からしか生まれない」（同上。）という論理になるのである。

19) 同上書，253頁。

20) この点と関わり、イリノイ工科大学に関するミースの建築計画に関説して、八束氏は、こう述べている。すなわち、それにおいては「差異＝コンポジションは見えなくなり、システムが全面化するのである。この移行には、アメリカというシステムを活用することを可能ならしめる物理的背景が必要だった。これはプラグマティズムへの移行などではない。むしろ、形而上学の具現化への移行というべきだ」（八束・前掲書，229～230頁。）と。この場合に「形而上」に存在するのは、建築の世界をも含めた現代社会を編成する原理である「資本」である。

21) 「ミースの空間の神学は神なき神学、あるいは空間というかたちで物神化された神学なのだ。」（八束・は前掲書，113頁。）そのため、ミース自身も、「建築」は「現在ではなく新たな世紀、真の世紀に属している」（ミース自身の言葉，ピーター・前掲書所収，207頁。）と言う他はないのである。

22) 田中・前掲書，238～241頁参照。

23) 同上書，238～239頁。

24) トラスとは、「各部材の接合点をピンで連結し、三角形の集合形式に組み立てた構造」（『辞林　21』，三省堂，1993年，1491年。）のことである。

25) 田中・前掲書，239頁。

26) 八束・前掲書，295頁。

27) ミースが、この非理性的理性を捉えていたことに関しては、つぎのような指摘がある。すなわち、「建築の合理性…理性のパラドックスという意味では非合理性がある。…〔ミースの－引用者〕ガラスの箱は、普通のコンクリート造の建物に比べて、内部環境コントロール上の負荷という点で、技術的合理性に欠けている」（山本・稲葉・前掲書，200頁。）

というものである。つまり、非合理性を打ち出すことにより、ミースは、非理性的理性を具現する建築の合理性を捉えていると同時に、それを否定しようとしたのであると言える。問題なのは、それを否定した次元において何を明らかにするかということである。

28) 山本・稲葉・前掲書，155頁参照。

29) 「オフィスビルにおける『労働』やアパートにおける『生活』は、建築家とは別のカテゴリーの人間が体験／体現すべき事柄である。空間の造形から見れば、主体(建築家)ではなく、客体にかかわる事柄である。しかし、ミースは、主体を時代精神ないしテクノロジーの論理に置き換えることによって、それを非人格化＝匿名化し、同時に客体のイメージも見えなくしてしまう。」（八束・前掲書，293～294頁。）

30) 田中・前掲書，248頁。

31) 「《存在》というようなものは、存在了解のうちで開示されている。そして存在了解は、了解として、実存する現存在に属している。存在があらかじめ非概念的にでも開示されているがゆえに、現存在が実存する世界＝内＝存在として、存在者に――世界の内部で出会う存在者にも、実存するものとしておのれ自身にも――かかわることが可能になるのである。」（マルティン・ハイデッガー『存在と時間』，細谷貞雄訳，筑摩書房，1994年，(下)427頁。）ここでは、現存在の存在性の正当化が、存在一般が「あらかじめ…開示されている」ことにより成されており、それによって現存在は、存在一般から、その位置と意味を与えられるものとなっている。

32) この点に関しては、G.W.F.ヘーゲル『精神の現象学』，金子武蔵訳，岩波書店，1971年参照。

33) 田中・前掲書，249頁。

34) 同上書，248～249頁参照。また、「建築の真理は所与存在としての時代の本質に合致することにある。そして、自分が置かれているのは『技術』

によって特徴づけられる時代であるとミースは認識していた。」（同上。）ただし、田中氏の論考から推察すれば、ミース自身は、これを、「実体-現象」関係によってではなく、「真理-表現」関係において把握していたようである（同上参照。）。

35) 同上書，250頁。

36) G.ルカーチ『歴史と階級意識』，平井俊彦，未来社，1962年参照。

37) 田中・前掲書，251頁。

38) 同上。

39) 同上。

40) この点で、八束氏は、次のように述べている。すなわち、「ミースの建築の特質は、単純な形式、モダンな材料というかたちで一般化してしまえば、容易にコピーし得るものだったし、またそのようにして『近代建築一般』というものが、とりわけアメリカでは普及していった。…ミースのそれ〔コピー－引用者〕は、コピーを重ねるに従って原型とは似て非なるものになりかねない。…〔とはいえ、この場合には－引用者による補い〕コピーにはもはや、自覚的な運動とは異なる自動化のモメントが介在する。そこにBaukunstを超えた『モダン』が介在する」（八束・前掲書，298～299頁。）と。だが、ここで問題なのは、誰あるいは何が「自動化」された運動を動かす主体であるかということである。コピーには自己更新の原理は内在せず、したがって自己媒介することはない。

41) 田中・前掲書，258頁。

42) 同上。

43) 「ミースの建築の有機的一体性、マクロコスモスとミクロコスモスの照応などといった印象を作り出すために抑圧されているものは何か。それは脅威的な『約束』としての技術の時代の建築にディテールは存在しないという端的な事実ではないだろうか。これは、そこにはディテールしか存在しない――細部と照応する全体を統べる神はいない――という事

態の裏面である。この反転可能な二つの命題が示唆するのは部分と全体の有機的関係の喪失である。」（同上。）

44) これは、世界観としては、カントの、叡智界と現象界とで構成する、２世界論に同定されよう。

45) ミースがこうした問題に気づかなかった訳ではないということは、つぎのような本人の言葉からも了解しうる。すなわち、「我々は一つの時代の終わりにいるのではなく初め、即ち新しい精神に導かれ、新しい力、新しい技術・社会・経済的力に動かされ新しい道具、新しい素材を利用できる時代の初めに立っている。だから新しい建築が生まれるだろう。しかしその未来がひとりでに来ることはない。我々が正しい道に則る仕事をして初めて未来の立派な基礎が固まる」（ミース「1959年建築金メダル，『英国王立建築家ジャーナル』第66号，1959･7，308頁。）と。しかし、この「新しい精神」が彼岸ではなく此岸にあることを証さないかぎりは、存在一般によって現存在は措定されるということと同じ構造になってしまう。これを社会システムという地平に置き換えれば、未来社会によって現代社会は措定されている（つまり、位置と意味とを与えられている。）ということになる。

46) これは、論理構造としてはハイデガーの現象学であり、思想的立場としてはサルトルの実存主義であり、政治学的にはルカーチの意識論であると同定できよう。

47) もっともミース自身は、このことを「クラフトマンシップ」の確立によって乗り越えようとしたと見る見方もある。山本氏と稲葉氏に拠れば、「I.I.T.校舎群とファンスワース邸に見られたミースの追及の第一の要点は、このように混乱した40～50年代の建築のなかに、純粋な近代性の抽象を物の姿として提示するために、近代的材料であるスチールとガラス自体が、またそれを組みあげるアメリカの産業水準自体が…デザインの最終の仕上げを決定しているような形での新しいクラフトマンシップを

確立しようとする点にあった」（山本・稲葉・前掲書，４～５頁。）のである。これは、「ディテールの最後の一片にまで及んでいる構成の極端な単純化」が「施工における細心の注意と職人的な熟練を不可欠な前提としている」（同上書，115頁。）ことに基づいている。とはいえ、こうしたミースの試みや、それへの評価は、本稿本文の論理には無関心なものであり、本稿のようなミースの論理の本質の把握を転変させるものではない。論理構造には無関心な個別論点の提起は、理論的には可能なことである。なぜなら、現実は、意識主観内部に留まるものではなく、それをも含めた客観世界にあるからである。そしてここでは、客観世界の論理構造、つまりは社会システムこそが問題なのである。

Ⅲ

1）1852年生まれ。1926年没。スペイン・バルセロナの未だ建築途上のサグラダ・ファミリア（図６参照。）などによって有名である。

2）鳥居徳敏『アントニオ・ガウディ』，鹿島出版会，221頁。

3）「敬虔なるカトリック信者で、カタロニア主義者で、それから反合理主義者でという、三つの基本形というのは一般的にガウディを定義する要素になっていますね。しかし僕は合理主義者だと思ってる。ふつう合理主義っていうのは、バウハウス的なものを建築ではいうが、僕のいうのはそうじゃないんです。要するに構造の実験を、合理的な、科学的な手続きでやっていると。デザイナーのアプローチのしかたとは違って。」（磯崎新『アントニオ・ガウディとはだれか』，王国社，2004年，44頁。）なお、ガウディにおける非合理的かつ合理的という性格に関しては、つぎの分析も注目される。すなわち、「CADの解析の仕事というのはガウディが考えていたような、いくつかの基本的なコンセプトがコンピューターを使えるようになって、やっと日の目を見始めたと言ってもいい。表にそのコンセプトが出てきたという状態なっているんじゃないかとい

うことが言える。それより前は非合理的なものだというように見られていたものも、合理的に解析が可能である。追跡ができるし、形態も幾何学的なシステムで組み立て得るんだ、ということが出てくる。逆にガウディはどういう幾何学を組み合わせたら、こんな柱の形になったのかということを順々に追っかけていく。…そうするとかなりまともな形で筋が通っているよというのがだんだんわかってきた。」（同上書，68頁。）

4）鳥居徳敏『ガウディの七つの主張』，鹿島出版会，1990年参照。

5）鳥居徳敏「本ガウディ展の特色」，ミラクラ他『ガウディ　かたちの探求』（前掲），25頁。

6）同上文献，39頁。

7）同上。

8）クラウディア・アルシナ＆ジュゼップ・ゴメス・セラーノ「ガウディの幾何学」，ミラクラ他『ガウディ　かたちの探求』（前掲），45～46頁参照。

9）ブグザデー＆マルガリート・前掲文献，63頁。

10）同上文献，64頁。

11）磯崎・前掲書，80～81頁。なお、氏は、こうも述べている。すなわち、「建築の構造…解析することによって、形を探していくことになる。ところが、ガウディはそうじゃない。逆さ吊りというのは、計算というのは後回しで、構法も後回しで、いきなり引っ張り材のまく面、それからワイヤーの引っ張りというのを引っくり返せば、圧縮材に替えられるだろう。最も合理的な圧縮の分布状態が成立するのを探して行こうというような、模型実験のやり方です。言い換えると、形の決定性というものを建築家が自分の手で作らないで模型が作って、建築家はそれをフォローするという考え方だ」（同上書，46頁。）と。

12）同上書，77頁。

13）磯崎新「ガウディ建築の発想と構造」，中山公男・東野芳明・鈴木博之・

北川フラム・バッセゴダ・磯崎新・松倉保夫・入江正之・池原義郎・アルバルダネ・饗庭孝男・神吉敬三『ガウディを＜読む＞』，現代企画室，1984年，204頁。なお、ガウディは、「技術的なレベルにおいてのみ、近代建築の主流となった思考方式を採用していない。カタロニア・ヴォールトという、職人の手仕事が、もっともたやすく採用できた、実現可能な方式であった。だから、鉄筋コンクリート造も鉄骨造も、原則的には用いられていない、部分的な応用であった。いわば、みずからの仕事をもっとも可能性に富んだ組積造という枠の内側に置いたのである。」（同上論文，205頁。）こうした手法において、「鉄骨の使用があくまで補助的であったという点において、ル・コルビュジェが指摘するように、一九〇〇年を超えなかったといえるだろうが、そのかわり、組積造の重い形式を軽量化し、多様な造形的な可能性に満ちた薄膜構造へと付き抜ける過程を歩んでいた。それが表面に波や渦や溶融の形態がまとわりつき、彼独自の造形的な世界の産出を可能にした重要な原因たり得たといえるだろう。単なる装飾や恣意的な異様な形態としてみえる彼の建築の表相が、実は内部の骨体を組み立てる工法からの必然的な展開であることも、カタロニア・ヴォールトが、経済的でシンプルな工法であると同時に、三次元空間のなかでのさまざまな変態を生む可能性を秘めたものであったことに由来するとみることもできよう。」（同上論文，194～195頁。）

14) 磯崎『アントニオ・ガウディとはだれか』（前掲），132頁。

15) 同上書，133頁。この点に関しては、磯崎「ガウディ建築の発想と構造」（前掲）の196～197頁も参照。

16) 磯崎『アントニオ・ガウディとはだれか』（前掲），112～113頁。

17) 「ガウディの思惟は…十九世紀的な建築構造のなかに止まって、その根源を考え続けることによって、結果として近代建築をも抜け出るヴィジョンを示し得たのである。」（鈴木博之「ガウディ、その歴史上の定位をめぐって」，中山他・前掲書，52頁。）

18) ブグザデー＆マルガリート・前掲文献，64頁。

19) とはいえ、「彼〔ガウディー引用者〕の建築の構造は、抽象化された構造物ではない。建築の構造的原理は、建築の個々の具体的な形態とともに在る。」（鈴木・前掲論文，52頁。）

20) 磯崎・前掲書，153頁。

21) 同上書，172頁。

22) ここでの「解釈」とは、解釈学的行為という意味である。本稿では、解釈学は、ハイデガー流の現象学のヴァリエーションと把えている。なお、解釈学に関しては、ポール・リクール『生きた隠喩』（久米博訳，岩波書店，1984年）を参照。

23) 延藤安弘「集まり住みあう魂の領域　ガウディの集合住宅に学ぶ」，松倉保夫・佐々木睦朗・外尾悦郎・延藤安弘・山本伸生・森枝雄司・矢代真己『ガウディのフニクラ　カタルーニャの曲線』第２版，INAX出版，2001年，57頁。

24) 同上文献，57頁。また、「ガウディはきわめて大胆に有機的な自然というものを建築のなかにとり込んでいる。」（中山公男「未完成の作家としてのガウディ」，中山他・前掲書，13頁。）

25) この点に関し、ブレイクはつぎのように述べている。すなわち、「理想的な近代都市の原型であるル・コルビュジェの『輝ける都市』やワイマール共和国の住宅団地［ジートルング］は、二〇世紀の都市の急激な機械化と自動化に尺度を合わせた有機体というよりは、自動車時代に尺度を合わせた計画だった」（ピーター・ブレイク『近代建築の失敗』，星野郁美訳，鹿島出版会，1979年，131頁。）と。これに対して、鳥居氏に依れば、「ガウディは科学であれ、技術であれ、その時代の最先端を行く知識を自らの作品に取り入れようとする進歩主義者であり、建築への機械の導入は物理的にも、経済的にもなずべきこと…しかし、機械はあくまでも人のためのものであり、人の生活に貢献するものであって、人が機

械の便宜のために屈せられるのは本末転倒もはなはなだしいと言う」（鳥居『ガウディの七つの主張』（前掲），21頁。）ことである。

26）延藤・前掲文献，56頁。なお、このために、「常態化した集住景観、制度的な形態言語をいっさい打ち消し、生命ある存在を様々の、たがいに補足しあう建築言語によって生成し、メタファーとイメージを賦与し」、「自然の外的形態の直喩の方法」を取らずに「建築に自然の内部にある生命の秘密を振りつけることによって、隠喩の世界デザインを見事に開いてみせた」(同上。）ということも言えるのである。そして、「ガウディ建築は、自然化し、幾何学化することにより…建築全体を装飾化したのである。」（鳥居『ガウディの七つの主張』（前掲），190頁。）

27）拙稿「現代資本主義における人格と人権」，太田一男編著『豊かさの周辺　「棄民」と人権』，法律文化社，1994年，65頁参照。

28）これは、饗庭孝男氏の言うところの、ガウディの「生への希求」（饗庭孝男「パトスとしてのカタロニア」，中山他・前掲書，265頁。）ということになろう。

29）鈴木・前掲論文，52頁。

30）延藤・前掲文献，55頁。なお、延藤氏は、このようなガウディの建築物に、集合住宅の一つの理想を看ている。氏に拠れば、「スマートな個体性と豊かな共同性を精妙に結びあわせるために、集住体デザインで心がけたいことは、個と全体、内と外の対立をひとつにすることである」（同上文献、56頁。）が、「同一の場所に、集まり住みあう人と人の間に日常・非日常を通じて、多面的な協調・協働関係が生成することによる他者への思いやりの心」と「逆に、直接的交流は少なくても、空間の仕掛けを通じて、人と人の間に、ゆるやかな情緒的、感情的連帯が育まれることもある」という「集住の精神」の両義性が、ガウディにおいては、「創造的にゆるやかに結びあわせ」られ、「集住精神を触発する形態の不思議さがある」（同上文献，55頁。）とされている。

31) この点に関しては、拙稿「消費様式の変化と現代社会－ＴＶゲームを素材として－」（『生活経済学研究』第16巻，生活経済学会，2001年３月。）を参照。

32) ブグザデー＆マルガリート・前掲文献，63頁。両氏に拠れば、「これこそ、ガウディ建築が同時に持つコインの裏と表である」（同上。）ということになる。

Ⅳ

1）大川三雄「モダニズムを超えて」，大川他・前掲書，114頁。

2）それらは認識枠組みの変更、言い換えれば対象に対する知的形式の組換え、つまりはパラダイムの転換でしかないと言える。なお、パラダイムとその転換については、トーマス・クーン『科学革命の構造』（みすず書房，中山茂訳，1971年。）を参照。

3）Ｅ・ハワード『明日の田園都市』，長素連訳，鹿島出版会，1968年（原著初版は1898年に出版された。）。

4）相田・土屋・前掲書，100頁。

5）同上書，100～101頁。

6）菊池威『田園都市を解く　レッチワースの行財政に学ぶ』，枝報堂出版，2004年，１頁。

7）相田・土屋・前掲書，100頁。

8）同上。

9）つぎのような文言も、内容においては本稿との同一性を有するであろう。すなわち、「合機能」は資本という社会システム（原理）に対してのことであると理解すれば、「技術的な社会が…その中で合機能性，合構造性だけを判断して働いてきたことが一つの非合理に変化しつつあるということでもある。必要なことは、この合機能的な判断の合理性の現実を、人間的な価値判断の合理性へ変革することである。」（山本・稲葉・前掲

書，201頁。）

10) このことが、実践においても望まれていたことは、ジェラール・モニエ『二十世紀の建築』（森嶋勇訳，白水社，2002年）145頁などを参照。

11) この点に関しては、次のような考え方もある。「<生産と結びついた思考>の結果の一つとして建築はとらえられる。けれどもそれが思考のすべてではなく、人間は人間自体であることも考える。この思考の結果の一つ――芸術としても建築は存在する。」（山本・稲葉・前掲書，199頁。）

12) ブレイク・前掲書，212頁。

13) 以下のブレイクの代替策は、同上書の212～231頁を参照。

14) 「私たちの町や都市の景観に対する…乱暴な攻撃は…土地投機家に最大の利益を生み出すという唯一の理由のために行われている」（同上書，214頁。）。

15) 「まだ完全に使える古い建物の取り壊しを正当化する唯一の本当の理由は、またもや貪欲である。」（同上書，217頁。）

16) 「住宅建設業者とその材料供給者の利益は巨額であり、アメリカの都市とその生活と形態の破壊はほとんど完全だった。」（同上書，219頁。）なお、「高速道路建設のモラトリアムは、人々がまだ私たちの都市にいくらかでも残っている魅力を再検討する（あるいは再創造する）ことを促進するだろう。都市のなかの高速道路建設のモラトリアムは、近隣住区がこれ以上引き裂かれることに終止符を打つだろう。」（同上書，219～220頁。）

17) このポイントに関しては、ブレイクは、アスベストやシックハウスなどのことも念頭に置いて述べている（同上書，220～223頁参照。）。

18) 「単一用途地域制は、一言で言えば、都市文明の終焉を意味する。」（同上書，225頁。）

19) 「〔地域社会という－引用者〕規模においてのみ、脱近代の建築家は機能することが可能なのだ。」（同上書，226頁。）

20）「ボストンの古い波止場の慎重な復興は、ブルドーザーをまったく使わずに、本当に有機的な都市改造を生み出している。」（同上書，227頁。）

21）同上書，235頁。